

それでも、ガバ転生メイリンは異世界(?)を今日も生き抜く！

ドロップ&キック

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この作品は、人気作家めんりん先生箸『ガバ転生メイリンによる「こずみつくいら」再現物語 (<https://syosetu.org/?mode=ss|detail&pnid=234237>)』とのコラボ作品（三次創作）になっております。

まずは、コラボを許可していただいためんりん先生のご厚意に大感謝！

実は、前から先生の書く“転生メイリン”シリーズの一ファンだったのですが、描かれるメイリン・ホークちゃんがあまりに生き生きとして可愛かったので、『是非ともコラボさせてください』とダメもとで申し出たんですが、なんと快く引き受けてくださいました。

基本、先生の世界の「唐揚げ大好きメイリンさん」が、ガンダム進藤の世界へ落下(?)してくる話なのですが、実は……

“ガンダム進藤と地続きの未来ではなく、よく似た別の未来”
なんです(´・`)

いや、だって進藤の未来だと、プラントとザフトに厳し過ぎるとい
うか……(汗)

なので、このシリーズの舞台はプラントやザフトに優しいというよ
り『メイリンをいじめたくない』ので、結果的にプラントとザフトに優
しくなってしまったC・E・73』だと思っただけなだけばと。

進藤の方はこの時代を描くかはまだ未定ですが……”その先にあ
る筈の未来”と登場人物は同じでも、また歴史が異なる世界観(故に

異世界)ですので、いつかその時代を描く機会があれば、二つの『分岐した世界』のギャップを楽しんで頂ければな〜と。

めりん先生ほど愛らしいメイリンは書けないですが、転生したはいいけど全然再現できないことに気付いたメイリンと、

『転生少女の目から見た面白C・E・時代と愉快的仲間たち』

的なノリで楽しんで頂ければ嬉しいです(ゝゝ)

目次

- 第001話：「二重転生メイリン、異世界（？）に降り立つ!!」
1
- 第002話：「変わり過ぎてしまっていた歴史……えっ？ これホントに前世知識とか役に立たないんだけどお（泣）」
5
- 第003話：「そうじゃないかな〜と思っていても、いざ目の前にすると予想以上に動揺する事ってあるよね？」
10
- 第004話：「密談っていうのは、こう、なんというか……私みたいないたいけな少女の前ですることじゃないよね!？」
14
- 第005話：「おお、アスラン撃墜されてしまうとは情けない（毛根的な意味で）+あとパパンは意外なところ（非テロ）で人気者？」
19
- 第006話：「私とザクとコミュ力お化けども……ねえ、偉い人がそんなんでもいいの？ ちょっとプラントとオーブの将来が心配になる件について」
24
- 第007話：「たまには視点を変えて、別キャラの視点からでも……」
29
- なお、ラッキースケベは休暇を取りました”
29
- 第008話：「ぼへみあん・らぶそでい 意識すると『異邦人の狂詩曲』」
35
- 第009話：「星見役は私だってアニメ化されてるから知ってるけど、でもこんな話じゃなかったよね？」
41

第001話：〃二重転生メイリン、異世界(?)に降り立つ!?!〃

今更だけど、ふと思う時がある。

私の何がいけなかったのだろうか。

(ま、まさか唐揚げ食べ過ぎたせいじゃないよね……?)

あの日、そう九死に一生を得たヴェステンフルスさん(私のファインプレーのせいとは言いたくないにやあ……)からお礼を言われ、ストレスから唐揚げを揚げまくってしまったあの日……

いつも五個くらいしか食べられない唐揚げを、ストレスとその場の空気の合わせ技一本で、6個食べてしまったのだ。

当然のようにその夜、ひどい胸やけを起こして寝込んでしまった。

そして、そして……

「まさか、唐揚げにタイムリープを引き起こす、神秘の力が宿っていたなんて……」

私こと、中身が転生者のホーク姉妹の妹の方ことメイリン・ホークは、フアントムペインが襲撃してくる前の〃アーモリーワン〃に時間をさかのぼり戻ってきてしまいました!

きやは☆

って、きやは☆じゃねーってばよ!

なんで? どうして? WHY?

本気で意味わからないんですけどーっ!?

で、でも、問題はそれだけじゃなかった。いや、それどころじゃなかった!

そう私は今、大好きなお姉ちゃんに引つ張られて、ドックにある見学スペースに来てるんだけど、

「なんで〃ドミニオン〃が堂々と入港してくるのーーっ!?!」

アンタ、沈んだんじゃなかったの!?

しかも、なんとなくゴツくなってるし、おまけにカラーリングの赤い部分増えてるしいく。

教えてエロい人！

☆☆☆

「なーに、騒いでんのよ？」

“ペしっ”

「はうっ」

と私の頭をはたくのは、短髪がチャーミングなラヴリーお姉ちゃん、ルナマリア・ホークだ。

「ううっ、お姉ちゃんがぶったー」

涙目で抗議する私に、

「アンタが無暗矢鱈に騒ぐのが悪いんでしょ？ 周りの迷惑も考えなさいって」

「だって……」

「第一、そんなに驚くことじゃないでしょ？ そりゃあ、“ミネルバ”の横に、もつと大きな戦艦が並ぶなんて、中々にスペクタクルな風景だとは思うけど……」

お姉ちゃん、そういう問題じゃなくて！

「だって“ドミニオン”だよっ!? “敵国の軍艦”だよっ!？」

ドミニオンって言ったたら大天使さんのご兄弟で、そのくせ地球連合のラスボス悪役艦じゃんっ!!

「バカッ！ 滅多なこと言わないのっ!!」

そう言いながら、私は慌て気味のお姉ちゃんに口を塞がれてしまったのだ。

なんでさ？

「いいこと、メイリン……よく聞いて。実際はどうであろうと、建前的にはドミニオンは“アスハ家のお召し艦”なの。ムルタ・アズラエルがカガリ・ユラ・アスハと結婚した時に結納品として贈ったって、有名な話じゃない？」

へー、ドミニオンって今はオーブの船だったんだあ……ってそこじゃないって！

えっ？ カガリ・ユラ・アスハってアズラエルと結婚してたのっ!?
というか、アズラエルってピンピンしてるの!?

いや、そりゃアスランさんとは無いとはおもってたけど……

(ホント、どうなってるのこの世界……?)

結納の品に、中古の宇宙戦艦贈るって……実際どうなの？

「ねえ、メイリン……知ってると思うけどプラントは今、オーブとの“
緊張緩和交渉”の真っ只中なのよ。今回の両国の戦艦を並べた“合
同観艦式”だって、そのための政治パフォーマンスだし……お願いだ
から、滅多なこと言わないで？ ね?”

お姉ちゃんが、なんか頭良さげな件について……じゃなくて！

えっ？ でたんと？ ごーどーかんかんしき？

何ソレ？ メイリン、難しいことわかんない……

(って言ってる場合じゃないよ！)

だけど、そんな私の葛藤などどこ吹く風で、その隣では……

「どうしました？ “ザラ隊長”、顔色が優れないようですが？」

金髪の眩しいレイはいいとして、問題はセリフの中に出てきた名
前エ！

「ああ、すまない。あの時のことを少し思い出してな……それと、俺の
ことはアスランでいいよ、レイ。正直、ザラと呼ばれるのは好きじゃ
ない」

そう……本日付でミネルバ隊に合流したのは、黒髪凸っぱちの超大
物赤服！

(なんで、アスラン・ザラが、ミネルバ初期メンバーに居るのっ!?)

総員傾聴！ シンが居なくてアスランがいる。繰り返し。シンが
居なくてアスランがいる!!

アレックス・デインじゃなくて、まんまアスラン・ザラで通してる
アスランさんがいるんだってばさ!!

そう、カガリ様がアスランさんとくっついてない事に納得したの

は、これなんだよ。

オーブに居なくて、ザラ隊長がザラ隊長として赴任してくるんだもん！

しかも、「インパルスのパイロットとして」配属……これ、完全にシンのポジションだよね？

ああ、もう本当にどうなってるのこの世界！

(これじゃあ未来なんて……)

私が持つてる原作知識なんて、役に立たないこと確定だよお……

もはや先が見えないこのC・E・世紀……

わたくし事、中身が少々アレなメイリン・ホークは、果たしてこの先も生き残れるのでしょうか……？

第002話：“変わり過ぎてしまっていた歴史……えっ？ これホントに前世知識とか役に立たないんだけどお（泣）”

私、メイリン・ホーク。

今、あなたの後ろに居るの……

ごめんなさい！

嘘です！

いや、ちよつと気が動転してコズミック・ホラー風に始めてみようかな〜とか茶目つ気をだしてみただけだよ？

（それにしても……）

「まさか、ここまで歴史が違うなんて……」

私は“ミネルバ”であてがわれた部屋に籠り、情報端末のキーボードを叩きながら、『今いる世界』の現状を必死で確認していた。

（もう、予想外もいいとこだよ……）

私はそもそも、こことは違う……多分だけど『ガンダムSEED本編を正規の過去とし、そこから分岐した世界』に居たんだと思う。

だけど、唐揚げ食べ過ぎて気持ち悪くなつて寝込んで起きたら……

「よく似た、全然知らない世界”でした……」

他に言いようがないんだよ。

多分、一番変わったのはオーブ。

国が私知ってるよりずっと大きいっていうのはまだしも、歴史が全然違う。

例えば、先の戦争でオーブは地球連合に国を焼かれていない。

ウズミさんが失脚（現在、政界より完全引退状態らしい）した後、連合が「ねーねーマスドライブ貸して♪」って言ってきたら、景気よく周辺施設どころかカグヤ島丸ごと貸してあげたらしい。

なんでもオーブは既に宇宙戦力を軌道ステーションに集結し終え

ていて、特にマスドライバー使う急ぎに案件はなかった……というのが理由だったみたい。

なんか、オーブは地球連合と仲良さげだけど、お姉ちゃんに聞いたら、

『えっ？ オーブが仲良いのって大西洋連邦だけよ？ むしろ他の地球連合加盟国とは物凄く仲悪いんじゃないかな？ 特に東アジア共和国とユーラシア連邦は、露骨に敵視してるみたいだし』

とのことだった。

しかも、
『まあそれも、アズラエル氏がブルーコスモスの頭目だった時代までね。その時代は、大西洋連邦はブルーコスモス穏健派の牙城だったし。でも、強硬派の突き上げでアズラエル氏が失脚してから、オーブは大西洋連邦とも距離を置いてるかな？』
だって。

まあ、お姉ちゃん曰く『失脚したとは言ってるけど、傍目から見るとオーブの修羅姫様と結婚するから寿引退したようにしか見えないけどね♪』らしいけど、そんなことあるんだろうか？

☆☆☆

変わっていると言えば、ザフトやプラントも戦争の成り行きが大幅に変わっている。

細かい話はいくつもあるけど、象徴的なのは……

・クルーゼ隊長が、ヤキン・ドゥーエの最終決戦前に“戦死”している。

うん。なんか、スペースコロニー“メンデル”で、キラさんと撃ち合いになって戦死したらしい。

戦後直ぐに、遺体は「オーブから返却」されたらしいけど、体中に弾痕があって文字通り蜂の巣状態……死因は疑う余地もなかったんだって。

あのシーンって拳銃の撃ち合いじゃなかったっけ？

(キラさん、乱れ撃つたのかな？ 某デユナメス並に)

ところでプロヴィデンスはどうなったんだろ？ 誰が乗ったんだろ？

でも、その情報は上位軍規に該当していて、私の権限じゃ閲覧できなかった。

・超巨大ガンマ線レーザー“ジェネシス”が自爆していた。

なんでも、1射はできたけど2射目を撃とうとしたとき、いきなり爆発したらしい。

原因は、私が見れる範囲の情報だと『構造的欠陥』だったらしい。なんでも、1発撃つたびにニュークリアチャンバーを十分に冷却しないと構造に負荷がかかり破断の可能性がどうか……

難しいことは分からないけど、はつきりしてるのはその時にパトリック・ザラとジェネシスに詰めていたその一派が、暴発したガンマ線で全滅したってこと。

きつと、クルーゼ隊長が死んで動きやすくなった“ターミナル”あたりが暗躍したんだと思うけど……

その後、あおりで宇宙要塞ヤキン・ドワーエと周辺の艦隊は敵味方問わず大損害を被つたみたいだけど……なんやかんやで、割とあっさり目に両方の軍は引いたみたいだ。

☆☆☆

(そりゃカーバさんのクレーターが成功するよ)

ちなみにだけど、冤罪(?)をかけられ粛清されかけたシーゲル・クラインさんはまだ生きてるらしく、戦後ほんの短い間だけで混乱を治めるために政界に復帰したけど……すぐにまた雲隠れして、今も行方不明みたいだ。

(多分、オーブに居るんじゃないかな?)

ほら、だつてあそこにはお仲間?のお坊さんとかいるし。

今頃、悠々自適な南洋バカンスを楽しんでたりして。

(アロハシャツ着てウクレレとか弾いてたら、案外似合いそう♪)

えっ？ 場所が違う？

オーブはハワイじゃなくて、赤道直下のメラネシア？ いいじゃ

ん。どっちも南国っぽいし。

ラクス様は普通にプラントに居るけど、十中八九ミーアさんだろう
な。歌い方からして。

あれがラクス様本人だったらびっくりだ。

兎にも角にも、ジエネシスの爆発とそれで生じたヤキン・ドゥーエ
や双方の艦隊の大損害で連合にザフト、オーブも停戦に合意して“ユ
ニウス条約”は締結されたんだけど……

(ヤキン・ドゥーエの戦いの最大の見せ場が、“アスランさんとキラさ
んの一騎討ち”ってなんかフクザツ……)

あつ、そうそう！

アレックス・デイノって検索したらヒットしたよ！ それもすごい
数。

なんと、去年プラントでヒットしたヤキン・ドゥーエの戦いを題材
にしたVR映画(勿論、ザフト側から描かれた物。キラさんがモロに
悪役だった……)で、アスランさんを演じた役者さんの名前が“ア
レックス・デイノ”だった。

実はさ、アスランさんに

『あの……アレックス・デイノって名乗らないんですか？』

ってつい聞いちゃったら、お姉ちゃんに、

『それ役者でしょ！ ザラ隊長は本物！ 現実と映画の区別くらいつ
けなさい！』

って怒られた理由、ようやくわかったよ。

まあその後、お約束の「アスランと呼んでくれ」発言に、お姉ちゃ
ん嬉しそうだったけど。

☆☆☆

とにかくこれだけ色々違うんだ。

これまでのプラン、『原作を可能な限り再現して生存する』戦略は、全然役に立たないと思っただ方がいい。

「はあ、これからどうすればいいんだろ……」

私の脳内と心には暗雲が立ち込め始めた……その時、

“コンコン”

とノックの音がして、

「メイリン、入るわよ？」

あつ、お姉ちゃんだ。

一体何の用だろ？

ううっ……できればあまり、胃に負担がかからない案件だと嬉しいんだけどなあ。

第003話：“そうじゃないかな〜と思っけていても、いざ目の前にすると予想以上に動揺する事ってあるよね？”

皆様、おはこんにちばんわ。

メイリン・トマホークです。

えっ？　なんか違う？

動揺ぐらいさせてよ！

だって……

「ほう……これがザフト自慢の新型艦“ミネルバ”か。悪くないじゃないか？」

いきなり来たよ……オーブ遣プラント和平使節団、代表。

素人でもわかる仕立ての良さから考えて、どうやらフルオーダーっぽいツイードのパンツスーツに身を包んで大股で歩くマニッシュな女性……そうオーブからドミノオンに乗ってはるばるやってきた“カガリ・ユラ・アスハ”女史！

“ミネルバ”の視察に来たってことだけど、案内がタリア・グラデイス艦長直々についていう事なので、流石に手が空いてる者は全員でお出迎えってわけさ。

さつきお姉ちゃんが私を呼びにきたのは、そういう理由だったのだ。

いや、祈りが無駄になったままたしても胃痛案件だけど、どうも今回は悪い事ばかりじゃないみたいだ。

(カガリ様と一緒にいるのって、もしかして……)

お供らしい二人のうち片方は、落ち着いたの淡いピンクのレディーススーツをびしっと着こなした私と近い髪色の、まだ若そうだけど何だか大人びた女性(誰だ?)と……

(やっぱり、)

めっちゃ高級ブランドっぽい紺のブレザーと茶のチノパンに開襟シャツを合わせた余所行きの装いんだけど、カジュアルというかヤンチャな雰囲気か隠し切れない黒髪で赤い瞳の男の子……

「シン・アスカ……」

つい、思わず呟いてしまった。

やってしまったと思った時にはもう遅い！

“ぐりん”

「へっ？」

カガリ代表が、振り向いてツカツカと真っ直ぐ私に歩いてきて、「名は？」

「め、メイリン・ホークです」

こ、怖いよー！

なんというか、雰囲気か鋭い！

なんか、刃みたいな感じの人だ……原作のカガリ様って、こんな研ぎ澄まされた雰囲気な人だっけ!?

「よく、ウチ……モルゲンレーテの秘蔵っ子の名を知っていたな？」

シンは新進気鋭のMSテストパイロットだが、まだ世間に知られていないと思っただが

「そ、それなりに勉強してるので」

我ながら苦しい言い訳だ。

だけど、カガリ様はニヤリと癖のある笑いで、

「よく勉強してるようで何よりだ。きつと、近い将来良いオペレーターになるだろう？」

あれ？ 今、なんでオペレーターって……

「メイリン・ホーク、お前紅茶はいれられるか？」

「は、はい！ それなりには……」

「そうか」

カガリ様はニンマリ笑って、

「明日、デュランダル議長との会合をこの船ミネルバで行う。今日来たのはその下見だ」

「は、はあ……」

えっと、何が言いたいんだろ？

「お前に給仕役茶くみ係を命じる。同席するがいい」

「えっ!？」

いきなり何を言い出すんだこの人!？」

「アスハ代表、あまり勝手に若い乗組員クルーを誘われても困ります」

わーい！ 助け舟、到来！

心の中でいつも不倫艦長とか呼んでごめんなさい！

「カタいことを言うなグラディス艦長。ワタシが気に入ったんだ。文句はないだろ？」

えっ？ 何、そのジャイアニズム？

すると、お供の赤毛の女性が小声で、「もう！ お姉様ったら、可愛い女の子みかけると、すぐに声かけるんだから……」ってブツブツ言ってるけど、このカガリ様ってソツチの趣味なのっ!？」

(でも、結婚してるって……)

偽装結婚？ それとも、両刀……とか？

「それにワタシの言い出したことだ。デュランダル議長には、ワタシから許可を取っておくさ。あの御仁なら嫌とは言わんよ」

「ですが……」

艦長、お願いだからもつと粘って！

「艦長サン、あきらめた方がいいぜ？ カガ姉ねえ、一度言い出したら引かないからさ」

オノレー！ ここでフレンドリーファイヤを撃ってくるかシン・アスカ！

いや、今はフレンドリーじゃないけどさ。

「えっと、ボウヤは……?？」

「ボウヤはやめてくれよ、艦長サン」

すると、シンは私が知ってるよりずっと明るい……違う。幼きすら感じるずっと人懐っこい笑みで、ピツと親指で自分を指差し、

「カガ姉も言ってたけど、俺はモルゲンレーテ社のテストパイロットでアスハ家の私兵みたいなこともやってるシン・アスカ！ こう見え

ても、大戦の英雄”キラ先輩の後継者”って呼ばれてるんだぜ！」
はあっ!?

いや、これってどんな因縁よ……アスハ家の私兵っていうフレーズも気になるけど、シンがオーブに留まってるだけじゃなくて、キラさん大好きっ子になってるなんて……

「ま、まあ、まだモルゲンレーテでしかそう呼ばれてないけどさ」
突っ張り切れないなら言わなければいいのに。

グラデイス艦長のシンを見る目が、なんだか生暖かくなってるし

……

とうかシン、なに素直に頭撫でられてるのっ!?

さてはコヤツ……年上のお姉さんとかに可愛がられ慣れてるな？

いや、なんかそんな反応してない？

認めたくないけど、どうやら私のお茶会参加は決定みたいです。

ああ、泣きたい……心の平穏が切実に欲しい今日この頃でした。

☆☆☆

「ねえ、メイリン……アスハ代表に気に入られるって、アンタ一体何
やったの?」

「むしろ私が知りたいぐらいだよ、お姉ちゃん」

部屋に戻ったら、胃薬の通販サイトめぐりでもしてみようかなあ

……

第004話：「密談っていうのは、こう、なんというか……私みたいないたいたいけな少女の前ですることじゃないよね!？」

「どうやら、ジブリールの阿呆は未だにストライカーパック・システムとザフトのシルエット・システムが互換性があることに気付いてないみたいだな?。」

「それは朗報と言わべきだろうね? 我々の密約にまだ気付いてないと考えていいのかね?。」

「密約がある事くらいはわかってるだろうさ。かつては“アクタイオン・ルート”なんてグレイゾーンが存在していたぐらいだ。だが、具体的な内容まではわかってないだろうな」

「ほう……では、今回の訪問の目的は?。」

「額面通り、親善訪問や表敬訪問の類だと受け取ってる可能性が十分にあるってことだな。つまり……」

「動く可能性がある?。」

「ああ。いっそ、ワタシの首でも狙ってきてくれれば、やりやすいし手っ取り早いんだがな」

えーと、メイリン・ホークです。

きゅぴ☆

いや、これじゃあ卵3個生んじやうメイドリーさんだつてばさ。

何故かお茶くみをやらされてる眼前では、カガリ・ユラ・アスハオーブ産の腹黒とギルバート・デユランダルプラント産の腹黒が、カガリ・ユラ・アスハ国家機密? 軍事機密? を堂々と話しています。

えーん! 私、どうしてこんなところにいるんだろ?。」

「まあ、連合が何をどう動こうが、ワタシ達はワタシ達で動くだけさ。そっちはご自慢の“セカンド・ステージ”のMSをお披露目してくれるんだろ?。」

「ああ。無論だ。そちらは？」

「事前通告通り、”ストライク・ノワール”、”ブル・デュエル”、”ヴェルデ・バスター”の3機だ」

えっと……それって、確か外伝の”スターゲイザー”とかに出てきた機体じゃなかったっけ？

いや、私だって一応、映像化された奴は全部見たし。

でも、どうしてオーブが持つてるの？

「アクタイオンも先の大戦での数々のやらかしで、ウチに身売りしてから必死でね。セカンド・ステージとも数字の上では互角かそれ以上、中々に良い仕上がりだぜ？」

はい。説明ありがとうございます！

って今、カガリ様ってば、私を見てウインクしなかった？

というか、同席してる秘書……なのかな？ 赤毛のスーツさんに露

骨に睨まれたけど……

「それは楽しみだね。ところで核動力機は？」

すると赤毛のおねーさん、コホンと咳払いして、

「デュランダル議長、その情報は情報閲覧権限” Σ ”^{シグマ}以上の者にしか

開示できないと記憶しています。その茶くみ要員……失礼。給仕係は、それを満たしていないようですが？」

あつ、言われてみれば。

私、閲覧権限” Π ”^{パイ}だった筈……ちようど権限区分の真ん中くらい？

(あつ、これって退室を促されるパターンじゃあ……)

でもその希望は、

「構わないさ、フレイ。呼んだのはワタシだ。特例として許可しようじゃないか」

いともあつさり打ち砕かれた。

おによれカガリ・ユラ・アスハ！

ってちよつと待って！

(今、フレイって……)

もしかして、フレイ・アルスター!?

全然、雰囲気違うから気が付かなかったよ……そりゃ、ドミニオンが沈んでないから、生きてても不思議じゃないけど……
(だとしたら、なんでカガリ様の秘書みたいなことやってんだろ?)
やっぱりこの世界は謎だらけ過ぎだよ……

それはともかく……

「メイリン・ホーク、我がオーブはプラントと密約を結んでいて……その背景には、地球連合がユニウス条約に違反してこつそりニユートロンジャマー・キャンセラーを隠し持って、核動力MSやら核兵器やら密造し続けてるって現状がある」

ちよ、カガリ様!?

なに一介のオペレーターの前に、なにいきなり世界の裏事情みたいなこと話し出してるんですかつ!?

「その対抗上、我々オーブはある程度のニユートロンジャマー・キャンセラーの保有を、プラントから黙認……それどころか、新規製造用の素材供給まで受けてるのさ」

「そして、我々プラントは“ユニウス条約に抵触しない核動力に代替する動力”の技術協力を、オーブから受けているのさ。セカンド・ステージに採用されている“デュートリオン・ビーム送電システム”もその一環と考えてもらっていい」

ぎ、議長まで……

あつ、でもそうか。

オーブが連合に焼かれてないから、移民とか来てないもんね。

アニメ通りの技術開発ができたのってバツクに、

(オーブがいたんだ……)

「お姉様……出会ったばかりなのに、その娘に妙に甘くないですか?」

「まあ、可愛い娘だしな」

「お姉様っ! そのすぐ所かまわず誑し込もうとする悪癖、少しは自重してください!」

キコエナーイ。キコエナーイ。

私には何もキコエナーイ。

「一応、ストライカーパックとシルエットとの相互装備換装試験の為に、外装を少々いじった」テストメント改」を持ってきてるぞ?」
「ほう。パイロットは?」

「シン・アスカ」

うっ……来てたし、どこかで名前が出てくるとは思ってきたけど、
ここを出てくるんだ。

「使えるのかね?」

「使えるさ。メイリン・ホークは、昨日聞いてたな?」

だから、なんで私に振るの!?

「モルゲンレーテじゃ、キラ・ヤマトの後継者……そう呼ばれてる
逸材だよ」

そりやそうか……実際、キラさん一度倒してるしなあ。

しかも、パワーで劣るインパルスで。

「……それはまた興味深いな」

「ああ。存分に興味を持ってくれ。シンにはそれだけの価値がある」

あははく。

シンがオーブでも元気にやってるみたいでなによりですよーだ。

ああ、前世のお父さん、お母さん、メイリンは前世も今生も込みで
脳みそがぐらぐらと煮え立ちそうな感覚を初めて覚えていきます。

要するに、脳が情報の理解を拒み始めてるんだってば!

「一応、ワタシのストライク・ルーージュもルーージュNになってるが、今
回は式典仕様だからな。それに、別にワタシが乗るわけじゃないし」
「誰が乗るんだい? って聞くだけ野暮だろうな」

「当然、フレイだ」

なんかフレイさんが歳の割には大きな胸を張ってるけど……あれ
? なんて皆さん、そこに疑問を覚えないのかな……?

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「あら、メイリンおかえり〜って、なんか顔色が凄いことになってるっ!?」

「あはは……ちよつと、生涯に一度経験するかしないかの出来事がありました。できれば、一生経験したくなかった。切実に」

「……ホント、一体何があったのよ?」

何があつたってそりゃあ、

「軽く世界の深淵を垣間見た気分なんだよお」

ホント、ペラペラと重要機密を茶飲み話にする、今頃はチェスに興じてるだろうお気楽国家指導者共（カガリ様は今も指導者じゃないらしいけど……でも、国の重鎮だよね?）に、どうか罰が当たりますよーに!

あつ、そういうええばもうすぐバチ……じゃなかった。襲撃イベントがあるんだっけ?

嫌だなあ〜。ホント、どうなるんだろ?」

第005話：“おお、アスラン撃墜されてしまうとは情けない（毛根的な意味で）＋あとパパンは意外なところ（非テロ）で人気者？”

「へえー。アンタがアスラン・ザラか？　“キラ先輩と唯一互角に戦えた”って評判の」

「あ、ああ。オーブではそう伝わってるのか？」

「うん。あと、父親が体を張って人類史上最大の爆発オチを見せたってな!!」

うおい！

えーと……メイリン・ホークです。はい。

今、ミネルバの待機室ガールームに来てるんだけど、

（早速、シンがアスランさんに絡んでいたのでござる……）

ねえ、陣営変わっていても、少しお洒落さん（しかもちよつとお坊ちゃんっぽい）になってもそれってことは……シン、もしかしてアスランさんに絡まないと死ぬ病気にでもかかっているの？

いや、いやな絡み方じゃあたしかにないけどさ……

（はあ、ほら……アスランさん、あんなに笑顔引きつらせちゃって）

まったく、アスランさんの凸デコがこれ以上広がったらどうすんだ。

まだ若いのにさ。

「ちよつとアンター！　いきなり失礼じゃないっ!!」

あつ、好みのタイプは『アスランさん☆』って書きそうなお姉ちゃんが早速カウンターで噛みついた。

原作を知る身としては、レアな風景ダナーと。

でも、シンはきよとんとしながらも悪意がかけらもない顔で、

「へっ？　なんでさ？　パトリック・ザラってオーブじゃ割と評判いいんだぜ？」

へっ？　なんで？

「……何故だ？」

あつ、流星にアスランさんもその評価、疑問だったか……

なんせ、パトリック・ザラって言ったたら、『地球のガンマ線ロースト／人類絶滅風味』を作ろうとした人だしなあ。

どこをどうやったら評判がよくなるんだろ？

「だって当たり前じゃん？」

だけどシンはニコニコ（レア……）しながら、

「ガンマ線レーザーの第1射で、“勝ち馬に乗ろうと呼んでもないのにしゃしゃり出てきた東ア共（東アジア共和国）とユラ助（ユーラシア連邦）の艦隊を、連中の月面基地ごと消し飛ばして”くれたんだぜ？ オーブと大西洋連邦の連合艦隊にまで砲口向けたのはいただけないけど、それも史上最大自爆ネタでオチつけたし……オーブにはメリットしかないじゃん？」

あつ、そうか。わかつちやった。

この世界のジエネシスの砲撃ルーチン（？）、アニメと違うんだ。

最初の砲撃で増援艦隊と月面基地をガンマ線で“チン♪”した後、2発目を撃とうとして“あぼーん！”してるんだもんね。

（そっか、地球は直接狙われてないんだ……）

シンの当たりの柔らかさの理由の一つが、なんとなくわかった気がする。

「そりゃあ、宣戦布告なしに問答無用でヘリオポリスぶち壊して30万人くらい民間人を真空に放り出して大虐殺したのは、『こいつら頭おかしいんじゃない？』とか思うけど……それも、戦後しっかり補償してくれたみたいだし、そこはほら『あの時は戦争で、敵国同士』だったし、まあ仕方ないかなと」

あーあ……アスランさん、ついにorzになっちゃったよ。

それでいいのかオーブ国民？

立てよ国民！ ジーク地球連合！ みたいなノリじゃないの？

するとレイが優しい笑みでシンの肩をポンと叩き、

「俺はレイ・ザ・バレル。アスカさん、でいいかな？」

するとシン、人懐っこい笑みのままで、

「シンでいいぜ！　なんか歳近そうだし。俺もレイでいいか？」
レイは頷いて、

「じゃあ、シン……どうかその辺で。赴任してきたばかりのザラ隊長の心が折れそうになってる」

「なんでっ!?!」

……ザラ隊長閣下は、ついに床にのの字を書きだしちゃったよ。

まあ、シンは知らないっぽいけど、モロにヘリオポリスも当事者だもんね……アスランさん。

そして、そんなアスランさんの背中をさすって慰めるお姉ちゃん……何この混沌？

というかお姉ちゃん、目が獲物を狙う肉食獣プレデターっぽいんだけど、それはメイリンちゃんの気のせいかな？

☆☆☆

「ところで、Youは何しにミネルバへ？　どうやら一人のようだが？」

きよろきよろと見回すレイに、シンはニヒヒと笑って、

「ミネルバの艦長サン……えっと、グラデイスさんだっけ？に昼飯のお呼ばれしたのさ♪　艦長室の簡易キッチンで色々作ってくれるって」

はっ？

お昼ご飯につられてやってきたの？

それとあの不倫艦長、いきなり年下の男の子、なに一本釣りしてるのっ!?

これ、デュランダル議長あいて、激おこぶんぶん丸なんじゃ……

(いや、違うか……)

むしろ、デュランダル議長の差し金かな？

カガリ様、えっらいシンのこと買ってるみたいだし……本当に、興味持っちゃったかな？　これは。

「それはそれは、なら俺が艦長室に案内しようか？」

「おっ、助かる！ サンキュー、レイ！」

「礼には及ばないが……それにしても、わざわざ昼食を食べに来るとは、ひよつとして“ドミニオン”の食事は不味いのか？」

「いんや。美味しいことは美味いんだけどさ……ほら、レストランの食事とかって美味しいけど、こうなんかコレジャナイ感があってさ。俺、家庭料理とかの方が好きなんだよ」

「そういうものか？ 俺にはよくわからない」

なんか男の子2人が仲良く歩き出す姿を見送りながら、私は最近癖になりつつあるため息をつくのだった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆☆☆☆

「もうっ！ なんなのよっ、あのシンって子！ 失礼にも程があるわ！」

なんかプリプリお姉ちゃんは怒ってるけど、

「なんなのって……モルゲンレーテのテストパイロットで、アスハ家の私兵みたいなものだって本人言ってたじゃん？ あと、なんか力ガリ様……アスハ代表のお気に入りっぽいかな？」

「そういうことじゃなくて！」

いや、わかってるけどさ……

「お子様なんだから、しょうがないんじゃない？」

「お子様って……えっ？ あの子、そんなに年下なの？ 確かに年

下っほいけど」

いや、年齢は変わらんないんだけど、

「宇宙に来てまでママの手料理が恋しいなんて、可愛いものじゃない」
「そうでも思わないとやってられないっての。」

お姉ちゃんなんか納得したって顔してるから、まあいいけどさ。

私はメイリン・ホーク……最近、胃痛に悩まされるミネルバの美少女オペレーターです♪ きゃび☆

……ああ、真剣によく効く胃薬が欲しいですよーだ。

第006話：“私とザクとコミュカお化けども……ねえ、偉い人がそんなんでいいの？ ちよつとプラントとオーブの将来が心配になる件について”

「だからさあ、ルナマリアってスラッシュ・ウイザードの方がいいんじゃないかね？ ちまちま狙撃するよりもバアーツで弾幕張って、グアーツで距離詰めて一気にこう斧でズバンと真つ二つって戦い方のほうが、キャラにも合ってるって」

シン、擬音多すぎだっばさ。

「キャラって何よ？ キャラって。んー……でも、確かに言われてみれば、そっちの方が私に合ってるっていうのは、的外れってわけでもないか」

はい。相変わらず胃に継続ダメージ受け続けてるメイリン・ホークです。

私、ダメじゃん。

えー、只今ミネルバのパイロット選抜チーム、アスランさん／お姉ちゃん／レイ＋なんかオーブで健やかに育ってるらしいシンが、何をやってるかと言えば……

「次はアスランさん、やろうぜー！」

ああ、人懐っこいシンになんか慣れない。

あつ、「やろうぜ？」とか言ってるけど、『や・ら・な・い・か？』という方向性じゃないぞー。

一部の腐った皆さんには残念ながら。

何の事はなく、元祖ミネルバ組(?)が詰めてるのはミネルバのシミュレーションルーム。

そこで簡単に言っちゃえばシミュレーター使って対戦ゲームをやってるってわけだ。

ルールは基本1 vs 1で、使用機はザクオンリー。ただし、背

中に背負うウイザード・システムは自由選択って感じ。

なんで、こんなことが可能だったかと言うと……まあ、単純にグラデイス艦長が普通に許可出したからだ。

理由はこっちも単純で、『シンの腕前を確認してほしい』とデュランダル議長直々に頼まれたからなんだってさ。

(議長、本気でシンを取り込む気だとか……?)

流石にそれは難しいと思うけど……あの様子だと、ご両親だけでなく妹^{マユ}ちゃんも元気だろうし。

「いや、しかしだなあ」

割とグイグイ来るシンに、アスランさんは何となくタジタジだ。やっぱり、「パパンは自爆職人」とか「ヘリオポリス襲撃は頭おかしい」発言が尾を引いてるのかな？

とりあえず、意外とこういうシンは苦手らしい。

「あつ、俺の腕前疑ってるだろ？　こう見えても俺の操縦は、キラ先輩直伝なんだぜ？　それに」

ピツと自分を親指で指差して、

「これでもキラ先輩越え目指して、日々精進してるんだからなー」

あれー？　モチベーションの震源地(?)が正反対とはいえ、どうしてそこだけ局所的原作再現？

そして、そんなことを言ってしまったえば、黙ってられないのがミネルバに一人いましてね、

「そういうことなら、俺が相手したいんだが？」

「おつ、レイか？　いいぜ！　ストライカーパック……じゃなかったウイザードは何にする？」

「ブレイズでいい。機体はザク・フロントムだ」

「じゃあ、俺も同じ設定で、と。これで純粋に腕前だけの勝負だぜ！」
「望むところだ……！」

☆☆☆

「ほう。乗ったことのないザクでレイと互角か……確かにカガリ君が言うだけのことがあるな?」

「だろ? まあ、シンは色んなMSに慣れてるからな。それに正規のテストパイロットになる前は、鹵獲したザフトのMSで運搬手伝うって名目でよく遊んでたし。それもあるかもな」

「どっぴやあ!」

「ちょ!」

カガリ様に議長! 気配消して背後に立つのやめてくださいってばよ!

おそらく案内してるだろうグレイス艦長、あなたも同罪ですからね?

ついでに複雑な顔をしてるフレイさんも。

あつ、シンを除いたパイロットが一齐に敬礼してる。

シンはほよほよと手を振ってるけど。

「殺伐とした戦場を疾駆するMSを操る者たちだが、こうして親し気に交流してる姿を見ると、何とも微笑ましい気分になるものじゃないかね?」

「デュラさんは詩人だな? まあ、今後のことを考えればパイロット同士が良好な関係を築くのは、互いにメリットが多いかもな」

ああ、このコミユカお化けどもめ……もう遠慮なくファーストネームで呼びだよ。

カガリ様に至っては、渾名だし。しかもなんか微妙にデュラハンっぽいし。

（「亜人ちゃんは語りたいたい」とか懐かしいなあ……）

体感的にはもう20年くらい前の作品になってしまふもん。

「ところでルナマリア・ホーク」

「はっ、はい!」

おや? いきなりお姉ちゃんがご指名?

「シンのMSに対する目利きは確かだ。スラツシユ・ウイザードがお前に合ってるというなら、その通りなのだろう」

「は、はあ……」

「おーい、お姉ちゃんが反応に困ってるぞー。」

「という訳で……デユラさん、スラツシユ・ウイザードがくつついたパイロットが決まってるないザクは余ってるないか？ できれば〃標準機ウオーリア」

〃より〃フロントム上位機〃のがいい」

すると議長、その服のどこに隠し持っていたのかタブレット端末を取り出して、

「あるにはあるが……」

「買った。ルナマリアのパーソナルカラーへの塗装代込みでオーブ、いやワタシが言い値で買い取ろう」

「なんか、いきなりガンプラのオークションぽくなった!？」

「ちよ、ちよつと！ えつと、あの、」

「どう反応していいか判らなくなってるお姉ちゃん……哀れな。」

「安心しろルナマリア・ホーク。この程度で貸しとは思わん。可愛い娘に強力な武器を持たせるのは、言ってしまったえばワタシの趣味だ」

「一体どんな趣味?!？」

「良かったじゃないか。グラデイス艦長、どうやら幾ばくかミネルバの保有戦力が上昇したようだぞ?」

「あつ、艦長がこれ見よがしに溜息ついてーら。」

「というか、この2人って妙に馬が合ってるない?」

「なんとというか……男と女と違って色っぽい方向でなくて、悪ノリの方
方向性が……」

「まあ、それはいいとして。シン、そろそろ〃ミネルバ〃に〃テストメント改〃の搬入するぞ。お前に預けられた機体だろ? やってこい」
「あつ、そういえば〃てすためんと〃だっけ?」

「オーブの実験機、ミネルバでテストするとか言ってたような?」

「了解! あつ、悪いレイ。どうやら仕事みてーだ」

「かまわん。まず自分の仕事をするべきだ」

「ああ、なんだろうこの気分……フロントムペインに来てほしくないのに、何だか無性に来て欲しい気がする。」

なんか色々いっぱいいっぱいな今日この頃、一体私はどう立ち回ればいいんだろう？

えっ？ 下手に動かない方が身のため？

うん。実は私も少しそう思ってた。

「まあ、なるようになるかな……」

今更、私程度の力でなんとかなるものなんて、きっとないよね？
ないといいなあ……

第007話：“たまには視点を變えて、別キャラの視点からでも……なお、ラツキースケベは休暇を取りました”

うむ。2年経とうが3年経とうが心はいつも両性具有なカガリ・ユラ・アスハだ。

えっ？ お前は作品違うだろうって？ このシリーズのヒロイン枠は、メイリン・ホーク？

ま、カタイこと言うな。

それにワタシは元々、ヒロイン枠ではなくヒーロー枠だ。

(それにしても、メイリン・ホークか……)

ありや、おそらく“転生者”だろうな。ワタシと同じ。

『核動力機を含む』最新鋭機のテストパイロットだからという建前で、『意図的に隠蔽していた』シンの名前を一発で、迷いなく言い当てたんだ。

(まあ、現状で問いたただすのは、大して意味が無いだろうな……)

あの様子だと間違いなくはぐらかす。

ゼロさせるなら、もつと決定的な……言い訳できないレベルの言質げんちを取ってからだ。

(もつとも、あの調子なら遠からず簡単に墓穴を掘ってくれるだろう)

さて、どうでもいいことだが、ワタシは今、アーモリーワンのショッピング街をフレイとソキウスの誇るコンビニコンビこと、セブンとイレブンを引き連れ散策している。

実は、ワタシもフレイもソキウス達も、ここに来るのは初めてではない。

以前、和平交渉やら何やらで立ち寄ったことがあるのだ。

(以前より、随分と賑わってるじゃないか)

まあ、オーブはともかくプラントはもう2年も大きな戦乱がない。しかも先の大戦でプラント本国に大きなダメージがなかったことも大きく関係している(ぶっちゃけ、オーブも大西洋連邦もプラント本国を本気でぶっ壊す気はなかったし。東ア共やユラ助は知らんが)のだろうが、多少の平和ボケは看過すべきなのだろう。

(どっちにせよワタシの国って訳じゃないからなあ)

いっそのまま、市民レベルくらいでは平和ボケしてもらってもいいのだが、

「まつ、そういう訳にもいかんだろうな」

“とんつ”

言ったそばから、くるくると喜びを表す回転舞踊をしていた金髪の女の子が、大して厚くもない胸に飛び込んできた。

もしも原作のシンなら息もつかさずラツキースケベを発動させてるところだが、生憎とそれはワタシの属性じゃない。

ただ、その女の子をやりわりと抱き留め、

「目と目の間をしっかりと狙って射抜け。倒れたからと言って油断はするなよ？ 確実に息の根を止めるまで手を止めるな。いいか？ いい仕事ってのは確実な仕事って意味だ」

そう耳元で囁いた。

「う、うん。ステラ、わかった。ありがとう。おねーさん？ おにーさん？」

「どっちでもかまわん。ほれ、ツレが待ってるみたいだぞ？ 行つてやれ」

「ん。ばいばい」

「ああ。気をつけてな」

そして、少年二人の元へ小走りに行く。パツキン少女、いや“ステラ・ルーシエ”の背中を見るとはなしに見ながら、

「セブン、イレブン、手段は任せる。大至急、“ドミニオン”に戻り、MSの緊急出撃の準備をさせておけ。通信は使うな？ どこで誰が聞き耳立ててるかわからん」

「ソキウス」

「ああ、それと『お前たちの救えなかった後輩達が遊びに来てる』とも伝えててくれ」

「お姉様、一体……?」

ワタシはフレイの手を取り、

「きゃん♪ お姉様、こんな人前で♪」

ブレないのは流石と言いたいが、悪いが今はあまり構えん。

「フレイ、〃ミネルバ〃に戻るぞ」

「〃ミネルバ〃に、ですか? 〃ドミニオン〃にではなくて?」

これからのイベントを考えると、

「ああ。きつとそれが最適解だ」

ドミニオンには〃頼りになる艦長〃もついてるし、ワタシが戻らなくともどうとでもなる。

「あの娘から、血の匂いがした」

「えっ?」

シヨップピングはここでおしまい。まあ、ミアへの土産はとりあえず買えたんだ。

当面の目的は達したんだ、良しとしておこう。

観光の時間はここでお終い。これからは荒事の時間だ。

「もうすぐここは戦場になる」

どっちも娯楽と言えば娯楽かもしれんがな。

☆☆☆

「おい、ステラ……あのにーちゃん? ねーちゃん?と何を話してたんだよ?」

と不思議ちゃんのステラに問いかけるのは、見た目チャラ系青髪美少年、〃アウル・ニーダ〃で、

「ん? んー……おしごとのあどばいす? かな?」

「なんだそりゃ?」

小首をかしげるステラに、アウルは不思議そうな顔をするが、

「まあ、任務に支障がなければ何でもいいがな」

とクルルに対応するのは、オクレ兄ことステイング・オークレー。

「ん。ステラ、いっぱい殺すね?」

ふんすと小さくガッツポーズをとるステラに、

「おう。頼りにしてる」

「あははー♪ ステラ、気合入ってるじゃん?」

「おねにーさん”にあどばいすとおーえんもらったから、ステラ、がんばるー!」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

一方、その頃力ガリ様に”ミネルバ”でのお留守番を言い渡され、ラッキースケベのチャンス逃した我らがエース（オーブだけどね）と言えば……

「うっわー! こんなところでコートニーさんに会えるなんて、すっごい光栄です!」

すっごい大喜びしてましたとき。

あつ、メイリン・ホークだよつと☆

「そ、そうか……」

握られた手を上下にぶんぶんされて、かなり戸惑ってるのはえつと……

「お姉ちゃん、あの好青年ぽい人、だれ?」

「おバカ。コートニー・ヒエロニムスさんでしょ！　今や〝ザフト最強パイロットの一人〟って言われてる！」

えっ？

琴美・広末？　男の人だよな？　いや、あの美貌なら男装した長身の麗人って路線も……

「えっ？　ザフト最強のパイロットってアスランさんじゃないの？」

「うーん……その評価は人によってそれぞれじゃないかな？　そりゃあ私はザラ隊長……じゃなかったアスラン隊長だとは思うけどさ」

お姉ちゃんは、アスランさん推し。これ確定ね？

ところで、シンはなんであんなに喜んで……

「同じテストパイロットとして尊敬してます！　国は違いますけど、機会があれば是非ご指導ご鞭撻お願いします！」

あつ、そっち方面での初期好感度の高さなんだ。

「あ、ああ、まあ機会があればな」

あー、見るからに反応に困ってるなー。

そして、アスランさんに続きエース（だよな？）をまたしてもタジタジにさせるグイグイのシン・アスカであった。

（まあ、無遠慮で無垢な混じりっ気のない好意って、案外リアクション取りづらいもんねー）

ザフトの誇るエース二人も形無しにさせるなんて、もしかしてシンって無敵の撃墜王？

そして、くるりとまた遊びに来てたデュランダル議長（おい、仕事はいいのか？　どうせ不倫艦長目当てだろうけどさ。ケツ、リア充爆発しろい！）に振り向いて、

「議長ー！　いえ、議長閣下！　ご配慮に感謝致します！」

いつの間にか覚えていたザフト式の敬礼してらーね。なんかぶきつちよだけど。

すると議長、にこやかに気にするなと手を振って、

「ちようどシン君、君と〝テストメント改〟に『試してほしい装備』がいくつかあつてね。開発に関わってた彼が、ちようど〝ZGMF―X24S　カオス〟のテストパイロットとしてアーモリーワンに赴任

していたので、装備一式の搬入ついでにご足労願ったのさ」

「どんな装備だかわかりませんが、俺、テスト頑張りますね！」

「ああ。期待してる」

ああ、手だけではなく、シンのお尻から尻尾が生えて、ブンブンしてる幻覚が見えそうな気が……

第008話：“ぼへみあん・らぶそでい 意識すると
『異邦人の狂詩曲』”

「しんで？」

ステラ・ルーシエが放った弾丸はその日、“ZGMF-X31S

カオス”のテストパイロット、マーレ・ストロードの心臓をかすめた。

もし、この先が原作通りの展開なら、マーレ・ストロードは助かったかもしれない。

だが、

“いい仕事つてのは確実な仕事つて意味だ”

「おしごとはていいねいに」

“タンツ！ タンツ！”

追加に放たれた2発が、倒れたマーレ・ストロードの眉間から入り頭蓋を貫通し、脳漿をぐちゃぐちゃに破壊することにより彼の生命活動を正確に終わらせた。

「ぼへみあん・らぶそでい」

ふと思いついてしまった最近お気に入り曲のタイトルを口ずさむと、ステラは発砲（しごと）を再開したのだった。

まことに気まぐれに言った何気ない一言が、ささやかに歴史を変えた現場だった。

ところで、“Bohemian Rhapsody”に狂詩曲謳（ボヘミアン）われる主人公にふさわしいのは、ステラか？ アウルか？ スティングか？ あるいは他の誰かか……

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

“ちゅどおおろろろん!!”

「なんだなんだ？」

(あく、はじまつちやつたかあ)

最近、胃痛と友達なメイリン・ホークです。我ながらその自己紹介、
どうなんだ？とは思う。

シンがえーと、広末さん、じゃなかったヒエロニムスさん……長い
からシンプルにコートニーさんでいいよね？

とにかくシンがコートニーさんから色々な実験予定装備（なんか、
見たことのない物が大量に……）の説明を興味津々で受けてる最中、
唐突にその爆音と振動はやってきた。

とりあえずアニメと違ってMSをはじめ重要機材は、“ドミニオン
”との観艦式やら模擬戦やらと数々のイベントを控えて“ミネルバ
”に積み込み終えていたので、「ザクが倒れてく」的なアクシデントの
心配もなさそうだ。

「この状況で爆発とくれば、事故か敵襲しかないだろ？」

そう言いながらツカツカとハンガースペースに戻ってきたのは、
「おかえりー。カガ姉、フレイ姉ちゃん。ミリアさんに頼まれてた土
産、買えた？」

すると負傷してMSではなくしつかり二本足で歩いて帰ってき
たカガリ様は手荷物を掲げて、

「おう。ばっちりだ」

「ただいま。シンこそ、皆さんに迷惑かけてない？」

「あつたりまえだろ！ こっちはこっちで楽しくやってたぜ♪」

あつ、なんかほっこりしちゃった。

爆発の緊張感とか、爆風来てないのに吹っ飛んじやったよ。

「ま、とりあえず今起きてるのは後者の方だな」

さらっと話を戻したカガリ様に、

「何が起きてるのかわかってるのかね？」

そう大して慌てた様子もないデュランダル議長様。

「ああ。今回、性能を評価するはずだった3機の“セカンドステージ・

シリーズ”がコロニー内で大暴れしてるぞ？ 帰ってくる最中に、警

備MS蹴散らしてるの見えたぞ？」

そうフンとつまらなそうに鼻を鳴らすカガリ様……いや、フレイさ

んもだけどき、シンもセットでこの三人度胸が据わりすぎてない？

「それは大変だな？」

あつ、もう一人全然動じてない人がいた……そういえばこの大物政

治家二人、ある程度読んでたんだっけ？

「さて、警備隊は出てるようだが……どうするか？」

状況から考えれば、暢気すぎるデュランダル議長の言葉だったけ

ど、コホンとカガリ様が小さく咳払いをして、

「デュラさん、いやデュランダル議長……オーブの使節団代表として

ちよつとした提案があるんだが、聞かないか？」

「ほう……面白い提案なら聞こうじゃないか？」

二人の会話を聞いて、私は白々しさも勿論感じたけど、それ以上に

……

(お芝居見てるみたいない気分……)

これも転生者ゆえの感覚なのかな？

ふと、“様式美”って単語が頭に浮かんだ。

「今回、性能比較予定だったウチの3機、実は道すがら伝令を飛ばして

るから、もうスタンバってる筈だ。議長の許可があればいつでも出せ

るが？」

「準備がいいね。では……」

「お待ちください議長！」

そう静止したのはアスランさんで、

「アスラン君は反対かね？」

「おや？ 相変わらず赤服がよく似合うザラ隊長殿は、ウチが戦力を出すのがご不満のようだな？」

カガリさまーっ!?

えっ？ その可能性は考えてなかったけど、もしかしてこの2人で仲悪いの？

「……そういう訳ではありませんが、オーブがこの状況で戦力出すというのは……」

「ほほう」

カガリ様はニンマリ笑い……いや、目が笑ってない!?

「つまりこう言いたいのか？ 今回の襲撃は、“どこかの誰かさんが昔、どこかのコロニーにやったような襲撃”の焼き直し、今回はオーブが企画したプラントへの意趣返しだと？」

「そ、そうは言いませんが……」

「ワタシをあまりナメるなよ？ ザラの小倅……!!」

あつ、なんか静かに噴火してる感じが……

「確かにヘリオポリスで民間人を殺しまくったお前らには、今でも言いたいことはあるがな……だからといってこんなクソしょーもない報復を考えるほど、ワタシは阿呆にみえるのか？ あん？」

「まあまあ、落ち着きたまえ。カガリ君」

「しかしだなあ」

「では、折衷案としようじゃないか？ オーブからは出撃可能なMSを出してもらおう。その活躍如何により、嫌疑を持つ人間もなつとくするだろう。そして、アスラン君にも出てもらう。それなら、ザフトの顔も立つだろう？」

アスランさんが無言で敬礼したよ。

これで決まりかな？

「では、我々も！」

そう言つてMSに乗り込もうとするお姉ちゃんとレイだったけど、「それで？ 空っぽになった」ミネルバ”を誰が守るんだ？ 敵の襲撃目標はまだ全部わかつちやいないんだ。相手のターゲットの一つに、デユランダル議長が入つてたらどうする気なんだ、お前らは？」
「ぐっ……」

あつ、レイがいきなり撃墜された。

「その時は、いったい誰が戦うんだ？ ワタシか？ フレイか？ シンか？ それとも……」

ちよっ!?

なんでそこで目線を向けるの!?

「それともお前の妹か？ ルナマリア・ホーク」

「うっ……」

はい。次いでお姉ちゃんも。

時間がなかったせいで、全部は調べられなかったけど……流石は先の大戦で、その名を馳せた女傑つてどこかな？

「ルナマリア・ホークとレイ・ザ・バレルは、MS搭乗後に”ミネルバ”周囲に展開。状況の急変に対応できるよう”臨戦状態で待機”でいいか？ デユラさん」

「流石、いい判断だ」

☆☆☆

「ねえ、シン……」

軽率だなあーとは我ながら思うけど、

「なんだ？」

つつうーっつとさりげなく近づいて小声で話しかけてんだけど、シンは全然驚いてる様子もなく普通に返してきた。

「出なくていいの？」

「なんで？」

うっ、そうストレートに返されると返答に困るな。

(まさか原作で、一番に戦闘機コラスブレンダーで飛び出したからとは言えないし……)

「あつ、もしかしてアスランさんみたいに、俺達のこと疑ってるの？
えーと、妹の方のホークさんは？」

あつ、そういえばお姉ちゃんとはシミュレーターでイチヤイチャ
(?) してたけど、私とはまともに話したことなかったっけ？

(転生前のことがあったから、つい気安い関係だと思いついでたよ)

失敗失敗☆ ここはフォローしとかねば。

「なあに、その呼び方。メイリンでいいよ？」

「じゃあ、メイリンで」

シンも転移前のザフトのシン君と比べて格段にコミュ力高そうだなー。

なんとなく、本人の意思とは関係なく、フラグ乱立させそうな気配もするけど。

「とりあえずさ。見てるといいよ」

笑顔が優しいシンというのも、これはこれで……とと、そうじゃなく
くて。

「スウエン兄ちゃん達が出るなら、まず俺に出番とかないから」

「What!?!」

ちよ、今なんと言いました……!?!

第009話：“星見役は私だってアニメ化されてるから知ってるけど、でもこんな話じゃなかったよね？”

「あー、やっぱりプラントやザフトじゃ有名じゃないかな？ スウエン兄ちゃんは“スウエン・カル・バヤン”て言って、俺と同じモルゲンレーテのテストパイロット兼アスハ家、いや兄ちゃんたちの場合はむしろアズラエル家の私兵って感じかな？」

いや、だからなんでそのアズラエル家の私兵がオーブに居んのさ？

あつ、アズラエルがカガリと結婚してオーブに引っ越してきたからか？

“ドミニオン”と同じで、結納品の一部だっていうんかい。

「ナチュラルだけど、すんげー強いパイロットなんだぜ？」

……知ってます。

私だって“星見役”くらい見えますから。

ちゃんとアニメ化されてるから。

「あとシャム兄ちゃんとミューディーとのコンビネーションもバツチりだしさ♪」

あつ、やっぱりいるんだ。あの二人も。

確か……

スウエン兄ちゃん↓スウエン・カル・バヤン（20歳）

シャム兄ちゃん↓（多分）シャムス・コーザ（19歳）

ミューディー姉ちゃん↓（多分）ミューディー・ホルクロフト（18歳）

シンは16歳の筈だから、まちがってはいないかもしれないけど

……

（でも、やっぱりコレジヤナイ感が……）

「ところでメイリンはこんな所で油売っていいのか？」

あつ、ヤバ！

お姉ちゃんとレイ、もうMSに乗り込もうとしてるし、艦長と議長とカガリ様、ついでにフレイさんまでブリッジに歩き出してるしっ!!
「いくない! 私もいかなきゃっ!？」

「んじゃ、俺も〜」

「ワイ!」

「だって、此処に居てもやることないしさあー。コートニーさん、ストライカーパック……じゃなかったシルエットの調整に忙しいみたいだし」

ほれとシンが視線を向けた先には、なんかやたらと強そうなシルエットの前で、整備班に指示を出してるコートニーさんがいた。

「あれ?もしかして、シンの“テストメント改”だっけ?にシルエット装着しようとしてるんじゃ……」

だって、お姉ちゃんとマッチングの問題(?)で予備機兼いざという時の部品取り要員認定となったザク・ウォーリア、私的には“旧赤ザク”と呼びたくなるあの子には、まだガナーウイザードついたまままだし。

(まあ、まだ調整に時間かかりそうだから、いいのかな?)

「わかった。ブリッジに行くのはいいけど、せめてパイロットスーツは着てきなよ?」

「わーてるって」

そういえば、シンってあんまパイロットスーツ着てるの、こっちの世界に飛ばされてきてから見たことないなあ。

シミュレーターには、いつもほぼ「おしやれ普段着」みたいな恰好で乗ってるし。

いや、動きやすそうなんだけどね。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆☆☆☆

(派手だなあ……)

ブリッジに入ってきたシンを最初に一目見た感想がそれだった。

多分、ベシックになってるのは、ブラック&グレーの2トーンカラーのオーブ型パイロットスーツっぽいけど、

(黒地にレスキューオレンジとパッションレッドのファイヤーパターンが踊ってるよ……)

それ、間違いなくオーダーメイドで作ったやつだよね？

ちなみにヘルメットもお揃いのカラーだ。

(私服もだけど、シンって結構お金持ちなのかな?)

テストパイロットって結構な高給取りだって言うしな。

まっ、とりあえずオペレーターシートにつこうっと。

これで私も立派な“スターシップ・オペレーターズ”だ☆ なんかちって。

「あら？ シン、もうパイロットスーツ着てきたの？ 多分、出番ないわよ？ 機体だってまだ出れる状態じゃないみたいだし」

とは、スーツ姿なのに妙にブリッジに立ってる姿が様になってるフレイさん。

「俺もそう思うけどね。スウェン兄ちゃん達が“GTO-X”シリーズで出るんなら、まあ奪われたセカンドステージだって、簡単に無力化できんじゃないね？」

GTO-X? GAT-Xじゃなくて?

もしかして、スターゲイザーの再生産GAT-Xシリーズってオーブで作ってるみたいだから“Gundum Type Orb”とかって感じなのかな？

「油断しないことはいいいことさ。実際、“常在戦場”の心構えは重要だぞ？ ワタシなんてベッドの中だつて常在戦場だからな」

うわあ……この人、ベッドで何やってんだろ？

なんかアズラエルさんとか、大丈夫なのかな？

「常在戦場……ふむ。良い心構えだな」

議長、貴方様が艦長をチラ見しながら言うと、なんだか違う意味に聞こえます。

おつとそんなことしてる間に発進シーケンスが進んでるよ。

お仕事お仕事つと。

「ザラ隊長、進路クリア！ コンデイション、オール・グリーン！ 行けます！」

『了解した』

アスランさんは一度うなずき、

『アスラン・ザラ！ インパルス！ コアスプレnderで出る!!』

(ああ、やっぱりこの瞬間は格好いいなあ……)

私は、素直にそう思ってしまった。

さて、私は私でチェストフライヤーとレッグフライヤーの射出準備をしないとね。

☆☆☆

だけど、射出シーケンスを終え、状況を確認しようと戦況表示モニターを見た私は硬直してしまう。

だつて……だつて……

「なんで“ZGMF-X88S”がもう捕縛されちゃってるのぉくくくくっ!?!」